生態学的実在論に基づく意味論に関する研究

—理論的考察と実践的言語記述—

井上拓也

要約

本論文は、「生態学的実在論」(ecological realism) を基盤とする意味論である「生態学的意味論」(ecological semantics) を提案することを目的とした、理論的・実践的研究である。本論文は全９章構成であり、各章の内容は以下のとおりである。

第１章では、認知言語学に生態学的観点を導入することの必然性について論じている。まず、認知科学の発展段階を踏まえ、その一分野としての認知言語学が本来的に有する脳／身体から環境への志向性を明らかにしている。次に、生態学的意味論における意味観を概観し、その分析手法について整理している。最後に、生態心理学に基づく言語理論としての記述の方法論を構築する必要性について論じている。

第２章では、生態学的アプローチの導入と生態学的言語論の課題を検討している。まず、従来の認知的アプローチと比較しつつ、生態心理学の知覚理論やアフォーダンス理論 (affordance theory)、エコロジカルな情報の概念、生態学的実在論について説明している。次に、生態心理学において提示されてきた言語観を参考に、生態学的言語論の基本的な概念的枠組みについて確認し、その共通原理についてまとめている。最後に、アフォーダンスを構成論的に扱う必要があるという立場や言語そのものを環境中の資源すなわちアフォーダンスとして位置づける立場は、アフォーダンスがあくまで知覚・行為主体からは独立した存在であるという生態学的実在論とは矛盾するものであることを指摘し、生態学的実在論と矛盾なく言語を位置づけるためには、言語の表す意味もまたアフォーダンスであり、言語の使用は環境内での知覚調整を促す行為そのものであるとすべきであるということを論じている。

第３章では、生態学的意味論を構築するための準備段階として、アフォーダンス理論を再考している。まず、アフォーダンスが主体の存在や認識とは独立に実在するという生態学的実在論について再度概観した上で、アフォーダンスの無限性、脱場面性、そしてヴァーチャル性・リアル性という諸側面を確認している。次に、ア

フォーダンスの実現に際しての「現勢化」(actualization) と「知覚化」(perceptualization) という段階を「デザイン過程」(design process) としてモデル化している。最後に、Norman (2010) によって提唱されたアフォーダンスを知覚化する手がかりとしての「シグニファイア」(signifier) という概念を導入している。

第４章では、第３章で定義したデザイン過程に基づき、生態学的アプローチにおける言語の位置づけを提示している。まず言語を、情報や心的表象を伝達する媒体ではなく、アフォーダンスを知覚させる知覚化過程の中で作用するシグニファイアであると定義し、この言語観に基づき、生態学的な言語コミュニケーション・モデルを提示している。加えて、言語の創造性という問題について、第３章で述べたアフォーダンスの無限性や脱場面性、ヴァーチャル性といった特徴を強調することで、生態学的アプローチの中でも言語を扱うことが可能であることを論じている。

第５章では、本論文の提案する生態学的意味論について詳しく解説している。前半では、生態学的意味論の記述対象となる人間・環境系の概念を導入している。認知文法における認知図式や参照点構造、そしてフレーム意味論といった認知言語学の記述分析の手法を、生態学的意味論の記述手法として導入することを提案している。生態学的意味論では、言語化の対象の持つアフォーダンス構造の分析と、言語表現の持つシグニファイア構造という両側面からの分析により、当該言語表現の容認性を説明することを提案している。最後に、名詞の表す生態学的意味についての可視化の方法について論じている。

第６章から第８章では、認知言語学的な記述手法に依拠しつつ、生態学的意味論に基づく言語記述の実践例を提示している。第６章では日本語、第７章と第８章ではアイヌ語の「場所表現」という言語現象を扱っている。場所表現は、人間と環境との相互作用において用いられる言語現象であるが、言語化対象としての場所の有するアフォーダンス構造と、その知覚を促すシグニファイア構造の観点から、その意味論的・統語論的制約について統一的な説明を試みている。

第６章では、日本語の場所表現について生態学的な観点から分析している。「Xに行く」などの日本語の場所表現で、Xの位置に現れる名詞句の統語論的または意味論的な制約については、これまで場所性の概念を用いて論じられてきた。これに対して、参照点構造の観点から、Xの位置に現れる名詞句の持つ概念構造を分析し、

さらに場所の提供する知覚や行為の経験・可能性に基づく経験参照枠を用いて分析することで、場所名詞単体のシグニファイア構造についても分析している。これにより、場所表現一般の制約をシグニファイア構造の観点から統一的に説明している。

第７章では、アイヌ語の場所表現に関する文法的制約を生態学的意味論の枠組の中で分析している。アイヌ語の場所表現は従来のような場所性に基づく説明に当てはまらない特徴があり、特に指示詞や所属・所有形を用いる場合、および場所名詞を用いる場合の場所表現についての具体的な説明はなされてこなかった。そこで、日本語の場所表現と同様、参照点構造や空間参照枠などの記述的道具立てを用いて分析することで、一貫性のある説明を提供している。さらに相対名詞が用いられる因果関係を表す構文や時間的順序関係を表す表現も、場所表現と同じく参照点構造の観点から説明することで、文法的制約についての包括的な説明が生態学的意味論によって可能になることを示している。

第８章では、アイヌ語の場所表現の１つであるアイヌ語地名を、アフォーダンスの観点から分析している。アイヌ語地名の意味構造を認知言語学的な手法を用いて分析し、さらに生態学的観点からアイヌ語地名のシグニファイアとしての役割を提示している。アイヌ語地名は、単なる空間的広がりを表す名称としてではなく、その場での行為可能性つまりアフォーダンスを参照点として、当該の場所を目標とする参照点構造というシグニファイア構造を有するという分析が可能であることを示している。

第９章では、本論文で提案する生態学的意味論が、認知言語学にとっては理論的妥当性を補強しつつ、実在論的基盤を確立する一助となる一方で、生態心理学にとって言語の記述分析の方法として認知言語学の手法を取り入れることで、説明妥当性を獲得することにつながるという点で重要な役割を果たすということを示している。また、本論文で提案する言語観が、言語復興や防災といった社会貢献の側面を持つことを示唆している。生態学的意味論は、人間・環境系に依拠することで、認知言語学が前提とする身体基盤の意味論を越えた理論として発展させることが可能となる。本論文の提案によって、言語学は真に「人間・環境学」の一部門として位置づけられ、文化人類学や人文地理学、生態学といったさまざまな他分野を結びつける要となる学問分野に発展することが可能になるのである。